

【高齢者の生きがい】

東海社会福祉科学研究所

大北 秀雄

(17) 生活実態（終末期）

続き

次のようなことができなくなると生きていることに疑問が生じると思います。

- ・ 命を繋ぐための外出
健康を維持するためのリハビリや通院、日常に不可欠な買い物など、生活の基盤として必要不可欠となる外出
- ・ いきがいのための外出
家族行事や墓参りなど、個人にとって生きていることの意義に深く関わる必要不可欠となる外出
- ・ 楽しみのための外出
旅行や趣味、娯楽など、個人の人生をより豊かに、充実したものとするための外出

通常は生きていることと外出は同じようなもので基本的なものですし、その中で楽しいことも発見が可能になると思います。

外出はできないし、自分の意思が表現できなくなった場合のことを考えると、非常に悩みが大きくなります。

例えば自宅において心停止で発見、そのあと病院に運ばれて、回復の見込みが悪くても、機械に繋がれてまでして生命を維持するかということになった場合、家族はその人のことをどう思い、どう死なせるのかを選ぶのは、できれば結論を出すことがないことを願っているのが現実だと思いますが、結論は出さなければならない事実です。

自殺願望があるわけではなく、苦しみのまま生かされたくないことを切に願っているような人を、医療のプロが、何時間、何ヶ月、何年と寝たきりにするのは生活ができるようにすることは悩みですし、現実には難しいものです。それでも人間は、生きたいという希望があり、どうするのが判らないことも事実です。

そのことと尊厳死は簡単に答えの出せるテーマではありませんが、はっきりと意思表示をした人をどう扱うべきなのか、意思表示が不明確な人をどうするのかは、今後のあり方が問われる問題です。

高齢者の終末期を考えることをもっとオープンに話し合えることが必要であり、寂しさ、不安、理解などの多くのことを自然体で話すことができる場所が必要であり、高齢者予備軍は高齢者自身が、終末期に対し、どのような考えをもっているのかの実態を把握することが大変重要であり不可欠ですし、その内容

により多少でも支援ができることがあるのかを検討することが今後のことを考える上で大変重要なことだと思います。